J. Rakuno Gakuen Univ., **42** (2)：53～59 (2018)

帝国主義と福音

ポストコロニアル批評による新約聖書の「福音」の読解（3）

小　林　昭　博*

Imperialism and Gospel

Reading the Term “Gospel” in the New Testament through Postcolonial Criticism (3)

Akihiro KOBAYASHI*

(Accepted 7 December 2017)

（承前）

5．ギリシャ・ローマ世界における「良い知らせ」

5.1. ギリシャ・ローマ世界における「良い知らせ」[1)]

5.1.1. ギリシャ語の「良い知らせ」

ギリシャ語の名詞εὐαγγέλιον（良い知らせをもたらした者に対する褒美／良い知らせ）と動詞εὐαγγελίζομαι（良い知らせをもたらす）は，双方ともに形容詞εὐάγγελος（良い知らせの）からの派生語である[2)]。この形容詞はεὖ（良い）＋ἀγγέλλω／ἄγγελος(告げ知らせる／告知者）を組み合わせて作られた合成語であり[3)]，アルカイック期から古典期に活動したアイスキュロスがその著『アガメムノン』（*Agamemnon*）において繰り返し用いていることを除くと[4)]，その用例は僅かしかなく[5)]，ヘレニズム時代のユダヤ教文書（ギリシャ語70人訳聖書，ユダヤ教聖書外典偽典，フィロン，ヨセフス）や後1～2世紀のキリスト教文書（新約聖書，使徒的教父文書，新約聖書外典）には現れない語である。

上述した中性名詞のεὐαγγέλιονは，古くはアルカイック期の前8世紀のホメロスの『オデュッセイア』（*Odyssea*）まで遡源し[6)]，古典期の前5～4世紀から[7)]新約聖書と同時代のヘレニズム期の後1～2世紀を通じて[8)]，広く使われていたことが確認できる。

それに対して，動詞のεὐαγγελίζομαι（εὐαγγελίζω）はアルカイック期にはその用例が確

---

1) ギリシャ・ローマ世界のεὐαγγέλιονとεὐαγγελίζομαιについては，これまで繰り返し参照してきたFriedrich, *ThWNT* II, 705-735; Strack/Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament*, III, 4-11以外に，Henry G. Liddel/Robert Scott/Henry S. Jones, *A Greek-English Lexicon*, Oxford: Oxford University Press, [9]1940, with a revised Supplement, 1996 (New Supplement Edition), 704f.; Walter Bauer, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, Hrsg. von Kurt Aland und Barbara Aland, Berlin/New York: Walter de Gruyter, [6]1988, 642-644; Anatole Baily, *Dictionnaire Grec Français*, rédige zvec le concours de E. Egger, Édition revue par L. Séchan et P. Chantraine, Paris: Hachette, 2000, 824; Georg Strecker, Art. εὐαγγελίζω／εὐαγγέλιον *EWNT* [*Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament,* I-III, Hrsg. von Horst Balz und Gerhard Schneider, Stuttgart: Kohlhammer, [2]1992] II ([2]1992), 173-186＝『釈義事典』［ホルスト・バルツ／ゲルハルト・シュナイダー編『ギリシア語新約聖書釈義事典』Ⅰ-Ⅲ，荒井献／ハンス・J・マルクス日本語版監修，教文館，1993-1995年］Ⅱ（1994年），104-110頁，Helmut Koester, Art. Evangelium, *RGG*[4] [*Religion in Geschichte und Gegenwart. Handwörterbuch für Theologie und Religionswissenschaft,* 1-8 und Register, 4., völlig neu bearbeitete Auflage, Hrsg. von Hans Dieter Betz/Don S. Browning/Bernd Janowski/Eberhard Jüngel, Tübingen: Mohr Siebeck, [4]1998-2007] II (1999), 1735f. を参照した。

2) Friedrich, *ThWNT* II, 708, 719.

3) Friedrich Blass/Albert Debrunner, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, bearbeitet von Friedrich Rehkopf, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, [18]2001, §119_3.

4) アイスキュロス『アガメムノン』21，262，646ほか。

5) 『ギリシア碑文集成』（*IG*＝*Inscriptiones Graecae*）14：1120。この碑文集成は，*Inscriptiones Graecae XIV. Insciptiones Siciliae et Italiae additis Galliiae Hispaniae Britanniae Germaniae inscriptionibus,* ed. G. Kaibel, Berlin, 1890である。

6) ホメロス『オデュッセイア』14：152，166。

7) クセノフォン『ギリシャ史』4：3：14，アイスキネス『弁論集』3：160，アリストファネス『騎士』656。

8) プルタルコス『デメトリオス』17，『セルトリウス』11，『ポンペイユス』41。

* 酪農学園大学農食環境学群循環農学類キリスト教応用倫理学研究室
Christian Studies and Applied Ethics, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

認されておらず，したがって名詞形εὐαγγέλιονよりも新しい語だと目されている。その用例が確認できるのは古典期の前5世紀のアリストファネスの『騎士』（*Equites*）からではあるものの[9]，前5〜4世紀の古典期から[10] 新約聖書と同時代の後1〜2世紀のヘレニズム期に至るまで[11]，広く使われていたことが知られている。

また，これらの語からεὐαγγελιστής(良い知らせをもたらす者)[12] やEὐαγγελίος(良い知らせを与える者［＝神］)[13] といったごく稀にしか確認することのできない語が古典期に派生していったことも分かっている[14]。

さらに，ヘレニズム期のユダヤ教文書において，古典ギリシャ語には現れない女性名詞（抽象名詞）のεὐαγγελία（良い知らせ）[15] と合成語の動詞προευαγγελίζομαι(予め良い知らせいをもたらす)[16] が生み出されたことが確認されている[17]。

5.1.2. εὐαγγέλιονの語義

中性名詞のεὐαγγέλιονは，新約聖書では「福音」を表す術語として用いられているが，この語は本来は「良い知らせ」そのものを表す用語ではない[18]。ギリシャ語で「良い知らせ」を表す場合には，「良い」を意味する形容詞のκαλός やἀγαθός と名詞のἀγγελία(知らせ）を組み合わせて，καλὴ ἀγγελία やἀγαθὴ ἀγγελία といった表現を用いるのが普通であった[19]。

名詞形のεὐαγγέλιονは古くはアルカイック期の前8世紀のホメロスまで遡源し，「良い知らせに対する褒美／報酬」，すなわち「良い知らせをもたらした者に対する褒美／報酬」を意味する語であった[20]。すなわち，εὐαγγέλιονはεὐαγγελ＋ιονから成り，指小辞ιονが「小さなもの」ないし「小さなこと」を表すことからも窺われるように，この単語の作りから考えても，εὐαγγέλιονが「良い知らせに関わる小さなもの」ないし「良い知らせに関する小さなこと」を意味することは自明である[21]。

そして，εὐαγγέλιονの語が「良い知らせに対する褒美」を意味するということは，アルカイック期，古典期，そしてヘレニズム期を通して一貫しており，それは先述した前8世紀のホメロス，前5〜4世紀の古典期のクセノフォン[22]，アイスキネス[23]，アリストファネス[24]，そして新約聖書と同時代のヘレニズム期の後1〜2世紀のパウサニアス[25]，ルキアノス[26]，プルタルコス[27] といった著作家たちの用例からも明らかである。

また，前5世紀のアリストファネスは，εὐαγγέλιονの複数形εὐαγγέλιαを「良い知らせに対する感謝の犠牲の捧げ物」を表す語として用いている[28]。むろん，この用例から理解できることは，εὐαγγέλιονの語が「良い知らせ」そのものを意味するものではなく，「良い知らせに対する犠牲の捧げ物」の意で用いられているということである。したがって，これらの用例から，εὐαγγέλιονの語は「良い知らせ」に対する「褒美」「報酬」「犠牲の捧げ物」といった意味に限定されていたことは明白であり，この語は本来は「良い知らせ」そのものを表す用語ではないのである[29]。

---

9) アリストファネス『騎士』643。
10) デモステネス『第18弁論』323，メナンドロス『ゲオルゴス（農夫）』83。
11) パウサニアス『ギリシア案内記』4：19：5，ルキアノス『イカロメニッポス』34，プルタルコス『マリウス』22。
12) 『ギリシア碑文集成』（*IG*）12：1：675。この碑文集成は，*Inscriptiones Graecae XII. Insciptiones insularum maris Aegaei praeter Delu,* fasc 1: *Inscriptiones Rhodi, Chalces, Carpathi cum Saro, Casi,* ed. F. Hilter von Gaertringer, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1985である。
13) アリスティデス『弁論集』53：33：3。
14) なお，εὐαγγελιστής は古典期には僅かにしか確認することができないが，すでに述べたように（拙論「帝国主義と福音(1)」65頁注2），新約聖書では「福音告知者／福音宣教者」を表す術語として用いられている（使徒21：8，エフェソ4：11，Ⅱテモテ4：5)。
15) サムエル下18：20，22，25，27，列王下7：9，ヨセフス『ユダヤ古代誌』18：229。
16) フィロン『世界の創造』34，『改名』158，『アブラハム』153。フィロン以外の用例も含めて，詳しくはFriedrich, *ThWNT* II, 735参照。
17) 新約聖書には，εὐαγγελίαの用例は皆無だが，προευαγγελίζομαι はガラテヤ3：8に一度だけ用いられている（拙論「帝国主義と福音(1)」65頁注2参照)。
18) 田川建三『新約聖書　訳と註1――マルコ福音書／マタイ福音書』作品社，2008年，131-133頁。
19) 田川『新約聖書　訳と註1』131-133頁参照。ただし，先述したように，古典ギリシャ語には使用例はないが，ギリシャ語70人訳聖書とヨセフスがἐυ＋ἀγγελίαを組み合わせた女性名詞（抽象名詞）のεὐαγγελίαを用いている（上注15参照)。
20) Liddel/Scott/Jones, *Lexicon*, 705; Baily, *Dictionnaire*, 824; Friedrich, *ThWNT* II, 719; Koester, *RGG*[4] II, 1735f. 参照。
21) 田川『新約聖書　訳と註1』131頁参照。
22) クセノフォン『ギリシャ史』4：3：14。
23) アイスキネス『弁論集』3：160。
24) アリストファネス『騎士』656。
25) パウサニアス『ギリシア案内記』4：19：5。
26) ルキアノス『イカロメニッポス』34。
27) プルタルコス『デメトリオス』17，『セルトリウス』11，『ポンペイユス』41』。
28) アリストファネス『騎士』656。
29) Liddel/Scott/Jones, *Lexicon*, 705; Baily, *Dictionnaire*, 824; Friedrich, *ThWNT* II, 719；田川『新約聖書　訳と註1』131-133頁参照。

しかしながら，εὐαγγέλιον の語が新約聖書以前に「良い知らせ」そのものの意味で用いられていた事例が全くないということではない。例えば，前1世紀中葉のヘレニズム期にキケロが『アッティクス宛書簡集』（*Epistulae ad Atticum*）[30] において，εὐαγγέλιον の複数形 εὐαγγέλια を用いて，「良い知らせ」の意味に用いていることが知られている[31]。また，同様の用法は『プリエネ碑文』[32] や『東方ギリシア語碑文選集』[33] に収録されているキケロと同時代に位置づけられる碑文からも確認することが可能であり，εὐαγγέλιον の複数形の εὐαγγέλια が「良い知らせ」の意味で用いられていたことが理解できる。

だが，これらの用例は全て複数形の εὐαγγέλια であり，中性名詞単数形 εὐαγγέλιον を「良い知らせ」そのものの意味で用いるのは新約聖書が初めてであり，その用法が極めて特異なものであることに変わりはない[34]。

5.1.3. εὐαγγελίζομαι の語義

動詞形の εὐαγγελίζομαι の語は，中性名詞の εὐαγγέλιον とは異なり，その語義の歴史に変遷があったわけではなく，「良い知らせをもたらす」「良い知らせを告げ知らせる」という意味で一貫して用いられてきたことが知られている。

その用例は，前5〜4世紀の古典期のアリストファネス[35]，メナンドロス[36]，新約聖書と同時代の後1〜2世紀のヘレニズム期のプルタルコス[37]，パウサニアス[38] といった著作家から確認できる。おそらく，動詞の εὐαγγελίζομαι の語義に関しては，古代のセム語（近東語）に共通する語根 bśr およびユダヤ教聖書（旧約聖書）のヘブライ語動詞 בָּשַׂר の語義と通底するものだと理解することが許されるであろう[39]。

5.1.4. εὐαγγέλιον／εὐαγγελίζομαι の用例

5.1.4.1. 勝利の良い知らせ

古典ギリシャ語では，εὐαγγέλιον／εὐαγγελίζομαι は，ともに戦争における「勝利の知らせ」に関して用いられる術語であった。εὐαγγέλιον は戦争における「勝利の知らせに対する褒美」を意味し[40]，εὐαγγελίζομαι は戦争における「勝利の知らせをもたらす」「勝利の知らせを告げる」という意味で用いられている[41]。

5.1.4.2. 救済の良い知らせ

古代ギリシャの碑文には，「救済」（σωτηρία）と関連して中性名詞複数形の εὐαγγέλια が用いられている[42]。同様の用例はイエスと同時代人の伝記文学であるフィロストラトス『テュアナのアポロニオス伝』（*Vita Apollonii*）からも確認できる。このテクストにおいて，アポロニオスは「神的人間」（θεῖος ἀνήρ／θεῖος ἄνθρωπος）として描かれ，アポロニオスが奇跡によって「救済」（σωτηρία）をもたらし[43]，彼の到来を「良い知らせとして告げ知らせる」（εὐαγγελίζομαι）といった用例がある[44]。アポロニオスの用例はイエスの事績に εὐαγγέλιον／εὐαγγελίζομαι の語を当てはめた新約聖書の歴史的・社会史的背景を知るうえで極めて重要な用例だと言えるであろう。

5.1.4.3. 良い知らせに対する感謝の捧げ物

それ以外の用例としては，先にも指摘したように，εὐαγγέλιον の複数形 εὐαγγέλια が「良い知らせに対する感謝の捧げ物」の意で用いられていることが確認できる[45]。特に，それは「戦争の勝利の良い知らせ」や「救済の良い知らせ」に対して，「神に犠牲として供える感謝の捧げ物」の意味で用いられている。

5.1.4.4. ローマ皇帝と良い知らせ

ポストコロニアル批評を用いて新約聖書の「福音」を読み解いていこうとする本論文にとって，最重要

---

30) キケロ『アッティクス宛書簡集』2：3：1，13：40：1。
31) 詳くは，Friedrich, *ThWNT* II, 719 参照。
32) 『プリエネ碑文』（*Inschriften von Priene*, Königliche Museen zu Berlin, unter Mitwirkung von Th. Wiegand/H. Winnefeld, Hrsg. von F. Frhr. von Gaertringen, Berlin: Druck und Verlag von Geoge Reimer, 1906）105：40，41。
33) 『東方ギリシア語碑文選集』（*OGIS* = Wilhelm Dittenberger (Hrsg.), *Orientis graeci inscriptiones selectae. Supplementum Sylloges inscriptionum graecarum*, 2. Bände, Leipzig: Hirzel, 1903-1905）Ⅱ，458：37-38。
34) 田川『新約聖書　訳と註1』131-133 頁参照。
35) アリストファネス『騎士』643。
36) メナンドロス『ゲオルゴス（農夫）』83。
37) プルタルコス『マリウス』22。
38) パウサニアス『ギリシア案内記』4：19：5。
39) 拙論「帝国主義と福音(1)」65-77 頁参照。
40) プルタルコス『デメトリオス』17。
41) プルタルコス『ポンペイユス』66，パウサニアス『ギリシア案内記』4：19：5 ほか。
42) 『東方ギリシア語碑文選集』（*OGIS*）Ⅰ，13，20，Ⅱ，458。詳細は，Adolf von Deissmann, *Licht von Osten. Das Neue Testament und die neuentdeckten Texte der hellenisch-römischen Welt*, Tübingen: Mohr Siebeck, [4]1923, 313f. 参照。
43) フィロストラトス『テュアナのアポロニオス伝』7：21。
44) フィロストラトス『テュアナのアポロニオス伝』1：28，8：27。
45) ルキアノス『嘘好き人間』31，『イカロメニッポス』34。

の用例はローマ世界におけるεὐαγγέλιονである。この語の複数形εὐαγγέλιαはローマ皇帝および皇帝礼拝と密接に関係しており，繰り返しになるが，新約聖書におけるεὐαγγέλιονを理解するうえで，最重要の位置を占めている[46]。

ローマ皇帝は，「神」（deus／θεός）や「神的人間」（θεῖος ἀνήρ／θεῖος ἄνθρωπος）として「神格化」（consecratio）されることがあり[47]，その場合にローマ皇帝は，奇跡を行い，人々を癒し，「救世主」（σωτὴρ τοῦ κόσμου）と呼ばれることさえあった[48]。このような神格化を伴うローマ皇帝の事績に対してεὐαγγέλιονの複数形εὐαγγέλιαの語が用いられている。そして，その用例は「皇帝の即位」[49]，「皇帝の顕現によって到来する救済」[50]，「皇帝の子息の誕生」[51]であり，このようなローマ皇帝の事績に関することがεὐαγγέλιαと呼ばれている。

なお，動詞形εὐαγγελίζομαιが，ローマ皇帝に対して用いられている事例としては，後述するように，フィロン『ガイウスへの使節』（*Legatio ad Gaium*）における，ガイウスの「病気回復」[52]と「即位」[53]に関する用例があげられる[54]。

46) Friedrich, *ThWNT* II, 721.

47) しかし，ローマ皇帝が「神」（deus）ないし「神的人間」（θεῖος ἀνήρ／θεῖος ἄνθρωπος）として神格化（consecratio）されていたとは一概には言えない。この問題に関しては，弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』（社会科学叢書）日本基督教団出版局，1984年，268-331頁を参照。

48) Friedrich, *ThWNT* II, 721; Werner Foerster/Georg Fohrer, Art. σῴζω κτλ, *ThWNT* VII (1964), [966-1024] 1010-1012.

49) ヨセフス『ユダヤ戦記』4：618，656。ヨセフスの他の用例については後述する。

50) 『東方ギリシア語碑文選集』（*OGIS*）Ⅱ，458：37-38，40-41。詳細は，Deissmann, *Licht von Osten*, 313f. 参照。

51) 『プリエネ碑文』105：40，41，『東方ギリシア語碑文選集』（*OGIS*）Ⅱ，458：37-38。詳しい用例および文献は，Friedrich, *ThWNT* II, 721 Anm. 35, 36; Bauer/Aland, *Wörterbuch*, 643を参照。なお，男子の誕生が「良い知らせ」（εὐαγγέλια）として告げられることに関しては，アラビア語やウガリット語およびエレミヤ20：15の「良い知らせ」（bśr）の用例と通底する。この点については，拙論「帝国主義と福音(1)」67，70頁参照。

52) フィロン『ガイウスへの使節』18。

53) フィロン『ガイウスへの使節』231。

54) Strecker, *EWNT* II, 174f.＝『釈義事典』II，105頁参照。

5.2. ヘレニズム・ユダヤ世界における「良い知らせ」[55]

5.2.1. ギリシャ語70人訳聖書における「良い知らせ」

ギリシャ語70人訳聖書には，中性名詞単数形のεὐαγγέλιονの用例はない。ヘブライ語聖書の名詞形בְּשֹׂרָה の6回の用例のうち，女性名詞単数形のεὐαγγελίαへの翻訳が5回（サムエル下18：20，22，25，27，列王下7：9），中性名詞複数形εὐαγγέλιαが一度だけ訳語として用いられている（サムエル下4：10）。したがって，70人訳聖書はヘブライ語のבְּשֹׂרָה をεὐαγγελίαとεὐαγγέλιαとに訳し分けているのだが，70人訳聖書では女性名詞単数形εὐαγγελίαを「良い知らせ」の意に用い，中性名詞複数形εὐαγγέλιαを「良い知らせに対する報酬」を表す用語として使い分けている[56]。

しかしながら，女性名詞のεὐαγγελίαの用例が極めて稀有であることと相俟って，このような使い分けは他のいかなる文書にも見出しえない[57]。

また，70人訳聖書はヘブライ語の動詞בָּשַׂר の訳語として，ギリシャ語の通常の用法と同様に，中動相のεὐαγγελίζομαιを用いているが[58]，能動相のεὐαγγελίζωの用例も確認される[59]。用例数としては，中動相17回，能動相4回，合計21回が確認されるが，ヘブライ書聖書の動詞形בָּשַׂר の24例よりも3例少なく，サムエル上4：17（παιδάριον[少年]），歴代上16：23（ἀναγγείλατε[告げ知らせよ]），イザヤ41：27（παρακαλέσω[呼び出すであろう]）では，別の訳語が充てられている[60]。

しかしながら，70人訳聖書はあくまでもヘブライ語聖書のギリシャ語訳であり，── すでにタルグムを論じたさいに出した結論と同じように[61] ── 用例

55) ヘレニズム時代においては，パレスティナのユダヤ教もヘレニズム世界のディアスポラのユダヤ教も，双方ともにヘレニズムの影響下にあったことが知られているが（マルティン・ヘンゲル『ユダヤ教とヘレニズム』長窪専三訳，日本基督教団出版局，1983年参照），ここでは主としてギリシャ語で著されたユダヤ教の諸文書を扱うため，敢えてヘレニズム・ユダヤ世界という表現を用いた。

56) Friedrich, *ThWNT* II, 722f.

57) Friedrich, *ThWNT* II, 722f. なお，Strack/Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament*, III, 6-2をも参照。

58) サムエル下1：20，4：10，18：26，31，列王上1：42，歴代上10：9，詩39：10，67：12，95：2，ナホム2：1，イザヤ40：9（2回），52：7（2回），60：6，61：1，エレミヤ20：15。

59) サムエル上31：9，サムエル下18：19，20（2回）。

60) 詳細は，Friedrich, *ThWNT* II, 710を参照。

61) 拙論「帝国主義と福音 ── ポストコロニアル批評による『福音』の読解(2)」『酪農学園大学紀要　人文・社会科学編』42巻1号，酪農学園大学，2017年，［9-14頁］10頁参照。

としては旧約聖書の用例と同様の内容によって彩られており，ヘブライ語聖書の「良い知らせ」の用例に比して，70 人訳聖書の「良い知らせ」の用例に，特段の注意を払う必要のあるテクストはないものと結論づけられる。

5.2.2. ユダヤ教聖書外典偽典における「良い知らせ」

ユダヤ教聖書外典偽典（旧約聖書外典偽典）においては，εὐαγγέλιον／εὐαγγεζίζομαι の語はほとんど用いられてはいない。唯一の例外は動詞の εὐαγγεζίζομαι であり，前 1 世紀に位置づけられるソロモンの詩編 11：1 に「エルサレムにおいて，良い知らせを告げ知らせる者の声を宣べ伝えよ」(κηρύξατε ἐν Ἰερουσαλὴμ φωνὴν εὐαγγεζομένου) という表現が一度確認されるのみである[62]。

このテクストは，クレイグ・A・イヴァンズが指摘するように，「ソロモンの詩編 11 章全体はイザヤ 52：7 に向けられている」[63] のであり，ソロモンの詩編 11：1 のテクストは，イザヤ 52：7 を用いつつ，イスラエルの民が再び集められることを，「良い知らせ」として宣言するように命じるテクストであり，その意味においてイザヤ書（第二イザヤ）の「良い知らせ」の告知を踏襲する内容だと言える。

5.2.3. フィロンにおける「良い知らせ」

フィロンには名詞形の εὐαγγέλιον や εὐαγγελία の用例はなく，動詞形のみが用いられている。動詞の εὐαγγελίζομαι の用例は 9 回を数えるが[64]，προευαγγελίζομαι[65] も 3 回使われている[66]。フィロンの εὐαγγελίζομαι の用例のうち，聖書に関するものは 7 回を数えるが[67]，それ以外の用例は，先に言及したローマ皇帝に関わるものである。それらのテクストにおいて，フィロンはガイウス（カリギュラ）の「病気回復」[68] と「即位」[69] に関して εὐαγγελίζομαι の語を用いており[70]，フィロンもまたローマ皇帝に対して用いられる特別な語として，εὐαγγελίζομαι の語を受け取っていたことが理解できる。

5.2.4. ヨセフスにおける「良い知らせ」

ヨセフスは動詞形の εὐαγγελίζομαι だけではなく，中性名詞単数形の εὐαγγέλιον[71]，女性名詞単数形の εὐαγγλία[72]，そして中性名詞複数形の εὐαγγέλια[73] をも用いている[74]。

動詞の εὐαγγελίζομαι の用例としては，「勝利の知らせ」[75]，「政治的通告」[76]，「聖書物語の解釈」[77] といった多様な用例が確認できる[78]。また，名詞形の「良い知らせ」の用例としては，中性名詞単数形 εὐαγγέλιον[79]，中性名詞複数形 εὐαγγέλια[80]，女性名詞単数形 εὐαγγλία[81] が用いられている[82]。ヨセフスの「良い知らせ」の用例において，取り分け重要なのは，フィロンの用例と同様に，ローマ皇帝に関するものである。彼はウェスパシアヌスの「即位」に対して中性名詞複数形の εὐαγγέλια の語を用いており[83]，ここからヨセフスが εὐαγγέλια の語をローマ皇帝に関わる術語として，ギリシャ・ローマ世界の用例と同様の理解をしていたことが知られるのである。

5.3.「良い知らせ」の用法
── ギリシャ・ローマ的用法とユダヤ的用法

5.3.1. フィロンとヨセフスの用法

ここまで前 5〜4 世紀の古典期から新約聖書と同時代の後 1〜2 世紀のヘレニズム期に至るギリ

---

62) Friedrich, *ThWNT* II, 713 参照。
63) Evans, *VTSup* LXX/2, 658.
64) フィロン『ヨセフ』245，250，『徳論』41，『世界の創造』115，『モーセの生涯』2：186，『夢』2：28，『ガイウスへの使節』18：231。
65) フィロン『世界の創造』34，『改名』158，『アブラハム』153。
66) Friedrich, *ThWNT* II, 711, 723, 735 参照。
67) フィロン『ヨセフ』245，250，『徳論』41，『世界の創造』115，『モーセの生涯』2：186，『夢』2：281。
68) フィロン『ガイウスへの使節』18。
69) フィロン『ガイウスへの使節』231。
70) Strecker, *EWNT* II, 174f. =『釈義事典』II，105 頁参照。
71) ヨセフス『ユダヤ戦記』2：420。
72) ヨセフス『ユダヤ古代誌』18：229，『ユダヤ戦記』4：618。
73) ヨセフス『ユダヤ戦記』4：656。
74) これらの用例について，詳しくは，Liddel/Scott/Jones, *Lexicon*, 704; Bauer/Aland, *Wörterbuch*, 643; Baily, *Dictionnaire*, 824; Friedrich, *ThWNT* II, 723 参照。
75) ヨセフス『ユダヤ古代誌』7：245，250 ほか。
76) ヨセフス『ユダヤ古代誌』15：209，18：228，『ユダヤ戦記』1：607 ほか。
77) ヨセフス『ユダヤ古代誌』5：24，277，7：56，245-250。
78) 『ユダヤ古代誌』7：245-250 において，ヨセフスは二度動詞の εὐαγγελίζομαι を使っているが，それ以外は動詞の ἀγγέλλω に「良い」を意味する形容詞の καλός や ἀγαθός を付して，εὐαγγελίζομαι と同様の意味で用いている。詳細は，Friedrich, *ThWNT* II, 711 Anm. 69 を参照。
79) ヨセフス『ユダヤ戦記』2：420。
80) ヨセフス『ユダヤ戦記』4：656。
81) ヨセフス『ユダヤ古代誌』18：229，『ユダヤ戦記』4：618。
82) これらの用例について，詳しくは，Liddel/Scott/Jones, *Lexicon*, 704; Bauer/Aland, *Wörterbuch*, 643; Baily, *Dictionnaire*, 824; Friedrich, *ThWNT* II, 723 参照。
83) ヨセフス『ユダヤ戦記』4：618，656。

シャ・ローマ世界とヘレニズム・ユダヤ世界の「良い知らせ」の用例を概観してきたが，ここで少し視点を変え，動詞形εὐαγγελίζομαιと名詞形εὐαγγέλιονの用法に焦点を当ててみることにする。

フィロンとヨセフスのふたりは，ユダヤ教聖書（旧約聖書）の最重要の用例であるイザヤ書（第二イザヤ／第三イザヤ）における「良い知らせ」の用例に全く言及していない[84]。ユダヤ人著作家であるにもかかわらず，双方がともにイザヤ書（第二イザヤ／第三イザヤ）の「良い知らせ」に全く言及していないのは不可解である。

ゲルハルト・フリートリヒは，フィロンとヨセフスというユダヤ人著作家たちが，ヘレニズム思潮の影響下にあったことにその原因を帰している[85]。確かに，このような理解はヨセフスには妥当する。だが，私見ではこの考えはフィロンには当てはまらないものと思われる。この見解に関するフリートリヒの過誤は，フィロンとヨセフスの相違を等閑に付していることにある。つまり，ヨセフスは動詞形と名詞形の双方において「良い知らせ」の語を用いているが，すでに確認したように，フィロンは動詞形しか用いていない。ギリシャ・ローマ世界においては，「良い知らせ」は名詞と動詞の双方が用いられている。また，ギリシャ語70人訳聖書における「良い知らせ」は，ヘブライ語聖書の影響を受けているため，動詞形での用例が圧倒的である。

そう考えると，「良い知らせ」の用法には，動詞と名詞の双方を用いるギリシャ・ローマ的用法と動詞を中心とするユダヤ的用法のふたつの用法があると見なしうる。そして，ヨセフスが「良い知らせ」を名詞と動詞の双方で用いているのは，彼がギリシャ・ローマ世界，すなわちヘレニズム思潮の影響下で「良い知らせ」の語を用いていたからだと理解することが可能である。

そして，フィロンが「良い知らせ」を動詞でしか用いないのは，彼がギリシャ語70人訳聖書の影響下で「良い知らせ」の語を用いていたからだと考えられる。確かに，フィロンはギリシャ哲学者であり，彼はギリシャ哲学と聖書（70人訳聖書）およびユダヤ思想との統合ないし調和を企図した哲学者であった[86]。だが，フィロンの思想の根底を支えたのはギリシャ哲学ではなく，聖書（ギリシャ語70人訳聖書），取り分けトーラー（五書）であった[87]。そう考えると，フィロンが「良い知らせ」を動詞のみで用いているのは，やはり70人訳聖書の用法に従っていると考えるのが至当だと言えるであろう。

5.3.2. ギリシャ・ローマ的用法とユダヤ的用法

先に指摘したように，ギリシャ・ローマ世界において，「良い知らせ」は名詞形と動詞形の双方が用いられている。すでに指摘したように，この用法はギリシャ・ローマ的用法と呼ぶことが可能である[88]。それに対して，「ヘブライ語聖書→70人訳聖書→フィロン」という流れから示唆されるように，動詞形の用法を中心とした「良い知らせ」の用法はユダヤ的用法と名付けることが許されるであろう[89]。

そして，ギリシャ・ローマ的用法とユダヤ的用法というふたつの用法に関する認識が，これから論じる新約聖書における名詞形εὐαγγέλιονと動詞形εὐαγγελίζομαιの用法を理解するうえでの鍵となる。

---

84) 『ユダヤ古代誌』11：65において，ヨセフスはバビロニアからの帰還を宣言しているにもかかわらず，イザヤ書（第二イザヤ）を示唆するような言及は見られない（Friedrich, *ThWNT* II, 711f, bes. Anm. 75参照）。

85) Friedrich, *ThWNT* II, 711f.

86) フィロンによるギリシャ哲学と聖書（ユダヤ思想）との統合ないし調和の好例としては，「プラトン主義的ὁμοιωσίς θεῷ〔神との類似〕が，ユダヤ的・ラビ的imitatio Dei〔神の模像〕に変わった」（Alfred Adam, *Lehrbuch der Dogmengeschichte. I: Die Zeit der Alten Kirche*, Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1965 [⁶1992], 52）との見解があげられる。なお，プラトンのὁμοιωσίς θεῷという表現は『テアイテートス』176bに使われており，フィロンは『逃亡と発見』63において，プラトンのこの表現に言及しつつ自己の見解を述べている。この点に関する詳細は，Johannes Schneider, Art. ὅμοιος κτλ, *ThWNT* V (1954), [186–198] 190f. を参照。

87) ハリー・R・ボーア『初代教会史』塩野靖男訳，教文館，1977年，⁶1994年，18–19頁参照。

88) Strecker, *EWNT* II, 180＝『釈義事典』II，107頁は，「しかし名詞ευ[αγγέλιον]がギリシア・ヘレニズム伝承ととりわけ強くつながっていることは疑い得ない。まさしくその理由で，キリスト教宣教の語るべき新しいものが，周辺世界において理解可能な仕方で表現され得たのである」と指摘している。なお，Friedrich, *ThWNT* II, 722が，「70人訳聖書は新約聖書のεὐαγγέλιονの起源となる場所ではない」と言っているが，これは別様な意味である。すなわち，Friedrich, *ThWNT* II, 723は，新約聖書の名詞形εὐαγγέλιονと動詞形εὐαγγελίζομαιとが，ともにラビ的ユダヤ教における名詞形בְּשׂוֹרָה と動詞形בָּשַׂר に遡源すると考えているのであり ── ただし，ヘブライ語の動詞בָּשַׂר と新約聖書のギリシャ語の動詞εὐαγγελίζομαιとの直接的関係性を想定するフリートリヒの見解は正鵠を得ている ──，ギリシャ・ローマ的用法とは見なしていないということである。

89) もっとも，Strecker, *EWNT* II, 173–176, 179f.＝『釈義事典』II，104–105，107頁は，εὐαγγέλιονとεὐαγγελίζομαιの双方を，「旧約・ユダヤ教の伝統」や「ギリシア・ヘレニズム」に「一義的に帰属させることはできない」と見なし，「旧約・ユダヤ教伝承とギリシア・ヘレニズム伝承両方からの要素を採り入れている」と見なしている。

5.4. まとめ

ギリシャ・ローマ世界におけるεὐαγγέλιον／εὐαγγελίζομαιの語は，「戦勝の良い知らせ」「救済の良い知らせ」「ローマ皇帝に関する良い知らせ」を表す語として用いられている。「戦勝の良い知らせ」は，ヘブライ語のבשר(בְּשַׂרָה／בְּשַׂר)の用例を確認したさいに明らかにした内容と通底するものであり，確かにそれは「戦勝」した側には「良い知らせ」ではあったとしても，「敗戦」した側にとっては「悪い知らせ」でしかないというアンビヴァレントな意味合いを持っている。また，「救済の良い知らせ」は，ユダヤ教聖書（旧約聖書）のイザヤ書（第二イザヤ／第三イザヤ）に見られる神の救済を「良い知らせ」として宣告する内容に通じる用例だと言えるであろう。そして，「ローマ皇帝に関する良い知らせ」は，まさに古代ローマの帝国主義が「良い知らせ」(εὐαγγέλια) として発布されていたことの証左であり，最重要の用例だと言えよう。この用例については，特に中性名詞単数形のεὐαγγέλιονが「福音」という術語として新約聖書において用いられていることの意味合いをポストコロニアル批評によって読解していくときに，最もその影響を考慮しなくてはならない用例である。

ギリシャ語70人訳聖書の用例は，70人訳聖書があくまでもヘブライ語聖書のギリシャ語訳であるという基本的性格から言っても，70人訳聖書における「良い知らせ」の用例はヘブライ語聖書の用例と基本的内容に差異を持たないと結論することが許されるであろう。

ユダヤ教聖書外典偽典（旧約聖書外典偽典）の用例は，ソロモンの詩編11：1の用例のみであり，その用例がイザヤ52：7に影響を受けていることから言っても，このテクストはイザヤ書（第二イザヤ）の「良い知らせ」において論じた内容を踏襲しているものだと結論づけられる。

そして，フィロンとヨセフスの用例からは，このふたりが「良い知らせ」の語をローマ皇帝に対して用いていることが確認できる。これは新約聖書の「福音」の歴史的・社会史的背景として古代世界の帝国主義の存在を想定し，ポストコロニアル批評を用いて「福音」の語の意味を繙いていこうとする本論文にとっては，最も重要な意味合いを持っている。その意味でも，今後の議論において最も比較，参照していく必要のある用例である。

また，フィロンとヨセフスの「良い知らせ」の用法の違いから，ギリシャ語の「良い知らせ」の用法が，名詞と動詞の双方を用いる「ギリシャ・ローマ的用法」と動詞を中心として用いる「ユダヤ的用法」というふたつの用法があることが明らかとなった。この用法上の理解が新約聖書における名詞形εὐαγγέλιονと動詞形εὐαγγελίζομαιの用法を読み解くうえで鍵となるであろう。

（続く）